



筑紫女学園大学リポジット

幼児のひとり遊びに関する一考察 : 生成 (Werd en) としての遊びの概念を拠り所にして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯塚, 恭一郎, IIZUKA, Kyoichiro メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/64

幼児のひとり遊びに関する一考察

—生成 (Werden) としての遊びの概念を拠り所にして—

飯 塚 恭 一 郎

A Study of Enjoying Children's Own Basic Concept of Playing as Werden

Kyoichiro IIZUKA

はじめに

本研究は、幼稚園や保育園といった集団生活の場において幼児個人が集中して楽しむ遊びを「ひとり遊び」と呼び、その意義について考察することを目的としている。本論では、その前提として、着目する遊びの概念規定を行い、その遊びに対して「ひとり遊び」という名称をあてる意図を論じることとする。

手続き的には、「生成としての遊び」の概念を拠り所とし、保育現場での典型的な事例を挙げながら「ひとり遊び」の概念と言葉の意図を論じる。

幼児にとっての遊びは、現行の幼稚園教育要領解説（2008）において「幼児期の生活のほとんどは遊びによって占められている」と述べられているように、遊びそのものが目的である。個々の幼児は遊びの中で主体的に周囲の物や人といった環境に働きかけていくことで、好奇心や探求心を育み、考えたり想像したりしながら、多くのことを学んでいく。

なにより、その遊びが、集団生活の場で繰り広げられることに意味がある。幼稚園教育要領解説には「幼児期には社会性が著しく発達していく時期であり、友達とのかかわりの中で、幼児は相互に刺激し合い、様々なものや事柄に対する興味や関心を深め、それらにかかわる意欲を高めていく」という集団生活の場で友達とかかわり遊ぶことの意義が述べられている。近年、幼稚園教育の場で重要視されている「協同性の育ち」「協同的な遊び」もそうした文脈の中に位置づけられるものであろう。

だがここで、そもそも遊びの主体は誰なのかということに注目したい。それはまぎれもなく個々の幼児である。集団での遊び、あるいは仲間との遊びであっても、遊びの楽しさ、面白さを感じる主体は、幼児の「個」にほかならない。

たとえば「鬼ごっこ」を例にとって考えてみよう。鬼ごっこには、遊ぶための役割とルールがありそれは遊ぶ者全員で共有しておかねばならない。それを守ることによって鬼ごっこという遊びが成立する。だが、逃げる側の心にある恐怖感や緊張感、あるいは鬼側にある気持ちの高ぶりや捕まえたときの達成感といった、遊ぶことによって生じる様々な感情や楽しさ、面白さは、あくまでも

個々の幼児の心の中にあるもので、それは個々によって微妙に有り様が違うはずである。その気持ちを一緒に遊ぶ友達と共有することで、遊びの楽しさがより深く実感されることはあるが、なによりも遊びの主体である幼児個人が、鬼ごっこで遊ぶことの楽しさを感じられることが前提となる。

あるいは、遊びの形態としては集団であるが、内容的には「個」の遊びが展開される場合もある。たとえば、大きな段ボールを使って家や乗り物を共同製作で作るといった遊びを考えてみよう。作る目的や完成イメージについて友達同士でアイデアを出し合い話し合うという協同的な活動となるが、実際の製作作業に関しては、幼児それぞれが担う役割に応じた作業をするという場面が多いと思われる。ハサミや段ボールカッターを使って段ボールを切るという作業や粘着テープや接着剤を使って部材を貼り付けるという作業があるだろう。あるいは、形が組みあがったのち、絵の具を使って着色をするという作業が待っていることも想像できる。こうした製作に関わる作業も幼児にとっての「遊び」と位置づけるならば、それは幼児個々の製作的な遊びへの集中と充実が協同すればこそ成り立つ遊びであることがわかる。道具を使って丹念に段ボールをカットしていく幼児の姿や黙々と絵筆を動かして段ボールに思い思いの色を塗り重ねていく姿は、個人の遊びの楽しみに集中し没頭する姿そのものである。

ところで、幼稚園や保育園ではこうした幼児個人が主体として遊びを楽しむ姿はどのように捉えられ、評価されているのだろうか。

筆者自身はかつて幼稚園現場で保育に携わっていたが、近年遊ぶことが不得手な幼児が多くなっているという実感があつた。これについては国立教育政策研究所教育課程研究センターによって出版された『幼児期から児童期への教育』（2005）においても「幼児の生活は課業のように達成すべき目的に向かって行う活動が中心ではなく、いわゆる遊びが中心である」としたうえで「残念ながら、現代の生活環境においては、幼児の発達を促す生活体験が不足している」という指摘がある。

たとえば、何をしてよいかわからずにぼんやりとしている。あるいは確たる目的もなくあちこち歩き回る。そうした幼児の姿が年を追うごとに多くなっているという印象があつた。そしてこうした幼児は、保育室に準備されている遊具・玩具を使って遊ぶことが不得手だったように思う。遊具に興味を示さないという姿を見ることもあつたが、遊び方がわからないのか、保育者が遊具を示しつつ遊びに誘いかけても長続きせず、ほどなくして遊具を手放し別の場所に移動していく。何かに自ら能動的に働きかけ、それによって得られた感覚を「遊ぶことの面白さ」として心に積み重ねていない、遊び体験の不足を感じさせられる姿である。

保育の場に寄せる保護者の期待感にも気になることがあつた。3歳児入園で幼稚園生活が始まりまだ間もない時期に「お友達はできましたか？ 仲良く遊んでいますか？」という質問を受けることが少なくなかった。確かに、集団生活の場で我が子が他の幼児とうまく人間関係を作れているかが気になるという保護者の心情は十分に理解できる。また、幼稚園や保育園が他者と関係性を作っていくための様々な体験を重ねる場であることは言うまでもないことである。だが、そのためには幼児がその集団生活の場において、一人ひとりがその子らしく自分の好きな遊びを十分に楽しみ園生活を満喫することが大切にされなければならない。そうした幼児の生活のほとんどを占めるといわれる遊びの様子を受け止めることなく、人間関係に保護者の関心が集中するというのは、幼児の

発達や育ちに果たす遊びの役割が十分に理解されていないことを痛感させられたことだった。

また、幼稚園や保育園の現場に限らず幼児を育てている保護者の意識という面で言えば、保育雑誌や子育て情報誌、あるいはネット上の子育てQ&A等では、「子どもがいつまでもひとり遊びをしていて気になる」「このままで良いのか」「早く友達と遊べるようになってほしいが・・・」という質問を見つけることができる。ひとりで遊べることは、一定育ちの証しとして認めつつも、このままではだめなのではないか、早くその段階から卒業して欲しい、友達と遊んで欲しいという保護者のえもいわれぬ「焦り」が感じられる。だが、果たして幼児が好きな遊びに集中し没頭することは、早く卒業して次の段階に進んでいかなければならない一過性のものとして捉えてよいものなのだろうか。

そして、保育の現場に戻れば、「協同性の育ち」「協同的な遊び」「協同的な学び」というキーワードが流布されているという現状がある。もっとも、上述の『幼児期から児童期への教育』では、第2章第4節において、幼稚園生活と協同性の育ちについて具体的な説明をしているものの、闇雲に仲間作りや協同的な遊びを推奨しているのではなく、保育者が幼児一人一人に向き合い信頼関係を築いていくところから始まって、幼児が育っていく姿と遊びの変化が丁寧に記述されている。特に遊びについては、第3章第2節において「遊びが充実し自己を発揮する時期」の説明として、遊びの楽しさの発見から対象に没頭し遊び込むこと、そして友達と一緒に遊びをつくり出すまでの過程を描いている。決して「仲間ありき」「集団ありき」といった幼児の遊びや生活を押し進めているわけではない。

だが、現実の保育の現場では、これら「協同性」「協同的」という言葉が独り歩きをして、なにがしかの誤解や混乱があるようだ。相馬（2007）の実践事例には、遊びの中の協同的な学びの捉え違いから保育の手だてに悩み困惑する教師の姿が描かれている。また、川田ら（2009）は、いくつかの事例から「協同性という言葉にこだわればこだわるほど、子どもたちに集団で何かをさせることに力が入り、集団行動のできにくい子に対して、集団からはみださないようにという保育者の意図が強くなり、子どもの行動を強いることが多くなってしまったといった現実があった」と述べている。これらから「協同性」に対する現場教師の葛藤が浮かび上がってくる。

以上のように、集団生活場面におけるこうした幼児の遊びに関わる現状を鑑みると、今一度幼児の遊びについて、それも主体である幼児個人にとって遊びを楽しむことの意義を問い直す必要を感じてならない。それが本研究のそもそもの問題の所在である。だがそのためにはここで着目していきたい遊びについて、その概念を規定しておく必要がある。またその遊びに対して「ひとり遊び」という言葉を用いることとして、今後の議論を進めやすくしていきたいと考える。

1. 遊びの概念規定

まず、本研究における幼児の「遊び」について、その議論の前提にある概念について論じることにする。遊び概念の定義については、代表的なホイジンガー（Huizinga,J.）の定義、そしてそれに続くカイヨワ（Caillois,R.）の定義をはじめ多くのものがある。また、遊びの教育的意義を論じたもの、

あるいは子どもの発達と遊びの類型を規定し論じたものなど数多くの研究があるが、本研究においては、遊びを外的形態に着目したり分類をしたりするのではなく、遊びの主体である幼児の意識や心理状態に目を向けて遊びの概念を考えていきたい。なぜなら、ここで着目している遊びは、一人であるとか集団であるといった遊びの形態に関係なく、遊びの主体である幼児個人にとっての遊びの意義を問うものだからである。幼児個人が、目下自分が取り組んでいる活動に面白さや楽しさを感じているのかどうか、すなわち、それが遊んでいるという心地で活動しているものになっているのかどうかを吟味することになる。すると、今まさに活動している幼児の意識や心理状態に目を向けざるを得ない。

そこで、ここでは山田（1994）の「生成（Werden）としての遊びの立場からの遊び論」を拠り所とすることにする。山田は、「遊びは、その主体の意識や心理の揺れ動くままに、遊びに「なったり」「ならなかったり」するものだ、と考える」とし「遊びの本質についてのこのような動的な味方を、筆者は『Werden（生成）としての遊び』の見方と名付ける」と述べている。つまり、人間—あるいはこれを幼児と置き換えても良いが、その者がなすほとんどの活動は、その主体の意識や心理によって、すべてが「遊び」として捉えることができるということである。ここで山田は「遊びになる」という言葉も用いている。

たとえば、上述の段ボールを活用した協同製作活動も、幼児が取り組んでいる活動は「製作活動」と呼ばれるものであるが、ひたすら段ボールを切る動きや絵の具で塗り込む動きに没頭し打ち込んでいる幼児の姿があった時、そこに楽しさや充実感を感じているのであれば、それは「遊びになっている」と理解することができるということだろう。

ここで山田は、「遊びになる」ための三つの条件を提示している。第1の条件は「その活動が、その活動の主体にとって楽しいこと」としている。次に第2の条件として「主体にとっては、その楽しい活動自体が目的であって、少なくともその活動が、その外部にある他の目的達成のための単なる手段となっていないこと」を挙げている。そして第3の条件として「外部から強制され拘束されている、という感じを主体が持たないこと」としている。

この条件を、再び段ボールの製作活動を例に考えてみよう。第1の条件については、段ボールを切ったり絵の具を塗ったりする活動自体が楽しくなければ、おそらく幼児はそれに取り組むことはないだろう。「したくない」と言ってその場から離れていくに違いない。その活動に興味を示し、活動の面白さや楽しさがある程度イメージできるからこそ、幼児はその活動に取り組みそれが「遊びになる」のだと思われる。

第2の条件については、いささか条件を満たしているとは言い難い。その製作活動には「段ボールを活用して友達と協力して何かを作り上げる」という目的があるからである。だが、山田は、条件がどの程度満たされるかについては、「原理的には主体の意識や心理と密接な関係にある」としている。そして「幼稚園ぎらいの子どもにとっては、幼稚園での『お遊び』などは自分にとってはとても『遊び』なんかではない、と語っていても、或る時期又は或る瞬間は『遊び』になっている場合があり得る」と説明している。つまり、仮にその活動が何か明確な目的を達成するために開始されたものであったとしても、その活動の過程で活動の主体である幼児自身が自分のしていること

に楽しさと面白さを感じ、それに夢中になるような瞬間があれば、それは楽しい活動自体を目的としてしている「遊び」と捉えることができるということであろう。

たとえば年長児の遊びを想像した場合、現実的には純粋に楽しい活動自体を目的としてそれにのめり込むということは少ないかもしれない。知的に発達し、先の見通しを持って活動することが可能となる年長児は、むしろ明確な目的を持ってこそ活動への興味と意欲が持てるものである。どこまでが遊びでどこまでが目的遂行の活動なのか、その線引きは難しい。だが、その条件が主体の意識や心情に大きく左右されることを折り込んである「必要十分条件」ということであるのならば、段ボールの製作活動も十分に「遊び」として捉えることができる。

最後に第3の条件はどうだろうか。この活動が幼児同士の話し合いやアイデアから立ち上がってきた活動であるのならば何の問題もない。しかし一方で「保育者の働きかけ」から始まる活動や遊びも実際には多い。いわゆる「設定保育」と呼ばれる保育者が意図を持って幼児に働きかける遊びはそれに該当するものだろう。しかしこれも保育者の働きかけを、活動の主体である幼児が強制され拘束されて活動していると感じていなければ遊びとして成立するということである。

以上の議論から、集団生活の場における幼児個人の遊びの意義を問題にするにあたり、この「生成（Werden）としての遊び」の概念規定が、現実の幼児の遊びを吟味するのに有効な柔軟性を有していることがわかる。なにより幼児のその瞬間の意識や心情を基に遊びを捉えることができるため、その遊びがどのような人数や形態であっても遊びの主体である幼児個人の心を対象に考察を深めることが可能になる。以降、この概念を基に幼児の遊びを論じていくこととする。

2. 「ひとり遊び」と名付ける意図

さて、ここまで問題の所在である幼児個人が集中して楽しむ遊びに対してその概念について述べてきたが、これまでのところ、この遊びに対して適切な言葉をあてることなく議論をしている。だが、今後の議論と研究を進めるにあたっては、この遊びを一言で表現できる言葉をあてておくことが賢明と考えた。そこで筆者は「ひとり遊び」という言葉を選びだした。ここでは、その意図を述べることにする。

「ひとり遊び」という言葉からは、どういう遊びの様子やイメージが想起されるだろうか。一般的には、幼児一人が周囲の幼児はもちろん大人とも関わることなく、ただ一人自分の興味のある遊びに没頭し楽しんでいるというものだろう。周囲の人や環境に左右されることなく、ひたすら夢中になって遊んでいるような様子が想像されるが、一方で他の幼児と遊ぶことができず、仕方なしに自分一人で遊んでいるというような場合も含まれよう。上述の保護者が不安に思うひとり遊びは、後者の様子を心配してのものだと想像できる。

「ひとり遊び」の言葉の意味については、『幼児の教育用語事典』（1975）によると「ひとり遊びは社会性の発達の過程のなかで現れ、3歳ごろまでの子どもに多くみられるひとりだけで遊ぶ遊びのことをいう」と記述されている。また「この現象は、この時期の子どもの社会性が発達していないためにみられるものであるが、自己充実を図るためにはもっとも大切な遊びである」と、ひと

り遊びの発達的な意義が説明されている。しかし「年齢と共に減少していく」とされ、「常にひとり遊びしか行わない場合は問題の所在を考え、多くの子どもと一っしょに遊ぶことを経験させるように指導しなければならない」と指導の必要性が記述されている。

これによれば、ひとり遊びは成長発達と共に減少していかなければならない遊びの形態であるということになる。

ところが、これが1997年発行の『現代保育用語辞典』になると解釈が変化する。まず「子どもが他者と交渉をもたず何かに取り組む状態のこと」としたうえで「一人遊びをしている子どもの心の状態には、不安定の場合も、安定している場合もあり様々である」とその心理は一様でないことを説明し「仲間遊びを経験した後にも、年齢とは関係なく一人遊びをする子どもも見られ、そこに至る経緯は、偶発の場合と、自分で選択している場合とがある」としている。つまり成長とともに減少、消滅する遊びの形態ではないということである。加えて、幼児自身が意図的に一人遊びを選択することもある、と明言している。これは後述する「一人遊びオプション説」を基にした記述だと考えられる。

その後は、ひとり遊びが何かに熱心に取り組むような遊びの場合は「創造力や集中力、工夫する力が育つ」「自己を確立する上で重要な活動」と幼児の内的充実にとって大切な遊びであることが述べられ、「人とのかかわりの基盤」「人とのかかわりの充実、発展の前提ともなる行動として重視していく必要がある」と力説されている。

ひとり遊びについては、パーテン(Parten,M.)の遊びの分類に示されているものが有名である。(1)何かで遊んでいるとは言えない行動 (2)傍観者の行動 の次に (3)ひとり遊びという順序で分類されている。その後は、(4)平行的遊び (5)連合遊び (6)協同遊びと続くのであるが、小田(1988)は、「一人で遊ぶか集団で遊ぶかは子どもの意志で決まるものであり能力で決まるものではないという、『一人遊びオプション説』を紹介したうえで、その検討を行っている。また、柴田(2005)も「Partenのいう遊びの形態の移行は、非可逆的な発達段階ではなく遊び形態の1つのオプションであるという指摘がある」と紹介している。つまり、ひとり遊びは、年齢が上がって社会性が発達していくにつれて、遊びの頻度は減少はするが消滅するものではなく、むしろ幼児の意志によって選択される遊びになるということである。

こうした近年の研究を基にするならば、ひとり遊びは一過性の遊びで発達とともに見られなくなるものではなく、幼児のその時々々の興味や関心、あるいは意識の変化や心情の揺れによって選択される幼児の遊びの有り様のひとつと理解することができる。そしてひとり遊びを選択した幼児は、遊びの主体として自らがやりたい遊びを自分の心情に従い正直に楽しみ、満喫するのである。

ただ、こうした定義や研究で述べられているひとり遊びは、遊びの外的形態そのものが完全に「ひとり」の状態であると考えられる。一方、これまで本論で議論してきた幼児個人が集中して楽しむ遊びは、その外的形態については「ひとり」の状態であることに限定しない。それが集団で遊んでいる場面でも、協同的な遊びの場面であっても、幼児個人が心理的に「ひとり」の状態になってその行為に没頭している状態を問題にする。しかし、遊んでいる幼児の意識や心理状態に着目するならば、上述の定義や研究で述べられている遊びと本論で問題にする遊びに大きな差異があるとは思

えない。むしろほとんど同義であると言える。このような解釈から、本論で扱う遊びを「ひとり遊び」と呼ぶことが可能であると考えた。それが、この名称をあてる意図である。

なお、「ひとり」という単語については、「一人」と「独り」という2つの表記が可能であるが、それぞれの表記の吟味と検討ができていないことから、ひらがなの「ひとり」で表記することにする。

3. まとめ

これまでの議論を整理してみよう。

本研究の目的は、主体として幼児個人が集中し没頭して楽しむ遊びについて、その意義を考察することである。これは遊びの形態や人数、幼児の年齢や育ちは問題にしない。そこで、こうした遊びはどのような概念で規定される遊びになるのか明確にするために、「生成としての遊び」の概念を拠り所にして考察をした。この概念においては、幼児の活動が遊びになるための条件があり、それは「その活動が、その活動の主体にとって楽しいこと」「主体にとっては、その楽しい活動自体が目的であって、少なくともその活動が、その外部にある他の目的達成のための単なる手段となっていないこと」「外部から強制され拘束されている、という感じを主体が持たないこと」の三つである。この条件を基に幼稚園や保育園で見られる幼児の遊びの典型例を挙げて議論した結果、この「生成としての遊び」の概念規定が、幼児の遊びを吟味するのに有効なであることがわかった。特に、幼児のその瞬間の意識や心情を基に遊びを捉えることができるため、その遊びがどのような人数や形態であっても遊びの主体である幼児個人の心を対象に考察を深めることが可能である。

次に、ここで着目していく幼児の遊びを「ひとり遊び」という名称をあてることにした。これは近年の研究結果において、ひとり遊びは年齢が上がって社会性が発達していくにつれて、遊びの頻度は減少しても消滅するものではなく、むしろ幼児の意志によって選択される遊びになるということに着目した結果である。ひとり遊びを夢中になって楽しんだ場合は、創造力や集中力、工夫する力が育つ、あるいは自己を確立する上で重要な活動であるとも指摘されており、それは、本研究で着目する遊びの姿と同義であることも明らかになった。

「生成（Werden）としての遊び」「遊びになる」という概念によって、幼稚園や保育園といった集団生活の場で繰り広げられる様々な遊びの中で、とかく見過ごされたり埋没したりしていた「ひとり遊び」について、再びその価値や意義について考え直すための道筋をつけることができた。以上のことを、「ひとり遊び」に着目した研究の序章として位置づける本論の結果とする。

おわりに

本論は「ひとり遊び」に着目した研究の序章ともいうべきものである。「ひとり遊び」の概念を規定し「ひとり遊び」と名付けた意図を説明したにすぎない。本格的な「ひとり遊び」のとらえ方や評価、あるいは「ひとり遊び」と呼ぶ遊びの発達の意味づけや裏付けといった肝心の作業は、まだこれからである。また、実際の保育の場で幼児が繰り広げる様々な遊びの実態やリアルな姿を

事例として採りあげ、幼児がひとり遊びに集中するその瞬間の意識や心情に焦点を当てることで遊びの意義を考察していくことを研究の手続きとする以上、実際の幼児が遊ぶ様子の観察と事例収集が重要になってくる。この事例収集を地道に取り組んでいかねばならない。

以上のことを今後の研究の課題として挙げ、本論を閉じることにする。

【引用・参考文献】

- 平井信義 編 (1975)『幼児の教育用語事典』教育出版株式会社
- 川田 学・津田千明 (2009)「幼児期における協同性とその援助の視点を探る」香川大学教育実践総合研究 第19号 pp. 65-78
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター (2005)『幼児期から児童期への教育』ひかりのくに
- 文部科学省 (2008)『幼稚園教育要領』
- 文部科学省 (2008)『幼稚園教育要領解説』
- 小田 豊 (1988)「4～6歳児における一人遊びオプション説に関する検討」『日本保育学会大会研究論文集』第41巻 pp.580-581
- 岡田正章(他)編(1997)『現代保育用語辞典』フレーベル館
- 柴田直峰 (2005)「幼児の遊びの共有過程の探索的検討ープレイルームにおける砂遊び観察の可能性ー」『立命館人間科学研究』第8巻 pp.81-89
- 相馬靖明 (2007)「保育の現場から 遊びの中の協同とは……」『幼児の教育』日本幼稚園協会 第106巻4号 pp. 54-59
- 山田 敏 (1994)『遊び論研究ー遊びを基盤とする幼児教育方法理論形成のための基礎的研究ー』風間書房

(いづか きょういちろう：幼児教育科 講師)